卒業六十周年に想ふ

～土佐中入学前後のことなど～

杉本　光朗

土佐高校二十八回生の卒業六十周年記念同窓会を、平成二十五年十月六日に、高知市で開催する予定で準備を進めているので、是非出席するようにとの便りが届いた。

昭和二十八年春の卒業であるから六十年という歳月が流れたわけで、当時十八歳の紅顔可憐な少年少女達も、今や数えて八十歳の傘寿を迎え白髪禿頭の翁・媼と化していることを思えば、聊か感慨なしとしない。

昭和二十二年四月から六・三・三教育が始まり、その学制改革による新制第一期生として入学し、中学・高校と六年間学んだわけで男女共学に若干の戸惑いを覚えながら喜怒哀楽の青春前期を過ごしたことになる。そう言えば国民学校の第一期生でもあった。往時を顧みて特に想うことの幾つかを記してみよう。

先ず第一は、両親への感謝である。昭和二十二年と言えば敗戦から未だ一年余り、占領軍からは民主化達成のためとして、各種の指令が相次いで出され既存の権威・権力は否定され混沌たる世相であった。

新憲法の制定・インフレの高進・新圓と旧圓の切替え・農地解放・公職追放等々で、旧来の価値観や制度は激変して社会の混乱、人心の動揺には激しいものであった。加えて食糧の配給も十分でなく、また日常生活に必要な生活物資も碌になく、多くの人々は窮乏の中に喘ぎながら懸命に生きていた時代であった。

明日への夢など持てないような時代であったが、戦に敗れたとは思えない奇妙な明るさも感じられる時代で、街には「りんごの歌」のメロディが流れていた。

一方、「星の流れに」の歌が敗戦の厳しい現実を示しており、否応なしに敗戦国の姿を認識させられたのも事実である。

占領下の改革の波に教育制度も大きく揺れ修身・歴史教育の禁止から六・三・三制、男女共学、ＰＴＡの誕生……と従来のものとその相貌は大きく変わった。

昭和二十二年四月一日から新しい教育制度が発足することになっており、中学への進学をどうするかが問題であった。

城東や海南等の旧制中学は試験による生徒募集はしないということで、新たに

地元に作られる無試験の新制中学に進学するか、学区制の制約のない私立の土佐中学を受験するかの選択を迫られたのである。

また、幸い試験に合格できたとしても通学をどうするかの問題もあった。当時、私は本山町在住であり、現在とは違い交通事情は極めて悪く、到底自宅からの通学などは望むべくもなかった。となると、高知市内或いはその近辺に住居を求めなければならないが、戦災や戦後の外地からの引揚げもあり、住宅事情も逼迫しており簡単ではなさそうであるが、これをどうするか、更に食糧事情の悪い中で食事をどうするか等々解決しなければならない問題が多々あった。

その上、入学時に納付する金額も相当な額であり、親としては頭の痛いことであったと思う。

いずれにしてもあのような状況の中で、本山から高知の学校を受験させ進学させるという決断は大変なことであったことと思う。特に六人兄弟姉妹の長男であったことを考えれば尚更である。

父と別れてから二十二年、母を送ってから十二年、思えば孝行らしいことを何一つしなかった不肖の子であったことが恥ずかしく、また、悔しい限りである。

残り時間も僅かとなり又あの世とやらで逢える日も遠くないと考えているが、再会の折には報恩の乏しさの詫びと同時に、土佐中学進学について改めて感謝の意を伝えたいと思っている。

第二のことは、良き師と友達に恵まれたことである。

大嶋校長先生をはじめ多くの先生方に御指導いただいたのであるが、別けても私として忘れ難い恩師としては、松浦先生、町田先生、古谷先生、西野先生、小松先生、久保田先生、吉田先生など多くの先生方から大切なことを教わったと思っている。

特に松浦先生にはお亡くなりになるまで、いろいろと相談事にものっていただいたり、仕事の上のことについてもヒントをいただいたり、と多大のご指導に与った。

次は良き友達を得たことであるが、先ず入学して最初に驚いたことは、何と頭の良い生徒の集まりであるか、ということであった。流石に全県下から自信のある者が合格しておりみんなに追いて行けるかどうか心配であったが、どうにか驥尾に付してもったようである。

田舎者で内気であり、また少々吃り気味でもあったので、中々親しい友人がで

きなくて市内から大量に進学して楽しそうに談笑している人々を羨ましく思ったものである。その内ぼつぼつと話し合える友もでき、お蔭で充実した学校生活が送れるようになった。

初めは川村容三君であったと思う。同君は戦争末期には本山に疎開していて顔見知りであったので話し易かったのである。また同君からは生涯の趣味となった囲碁を教わったが、現在でも団地の老人仲間と楽しむことができ地域との交流にも役立っている。

榊昌英君とは座席が近かった関係で、また浜口恭一君とは母の里が長浜であったことから、新階明夫君とは同君が永国寺町の尾木誠一君のお宅に下宿していたことから親しくなった。これらの皆さんには色々とお世話にもなり楽しい時間を持つことができたが、若くして亡くなり本当に残念なことである。

段々と人の輪が拡がるに従い新しく親しい学友の数も増えたが、中でも小松栄君、西山五朗君、公文俊平君、岡村毅郎君、前田典彦君、野村裕之君、吉村元秀君などとは、高校卒業後も大学生時代や在職の時を通じ今に至るまで一貫して厚い交誼に与っている。

特に野村・吉村両君とは、退職後は三人による貧乏旅行を年に三回ほど計画し、

東北や中部地方の秘湯巡りをしたり四国遍路をしたりして大いに旅情を楽しんだものであるが、今は事情があって中止になっているのが少しばかり寂しい気がしている。

この他ここに書ききれない程の多くの学友からも折にふれ多大の御厚情をいただいている。まことに有難いことである。将に、矢張り持つべきものは良き友達であると、しみじみ思う今日この頃である。

なお男女共学ということから、秘かに想いを寄せていた女性もいたのではないかと思われる向きもあるかと考えるが、そのような感情を持つには残念ながら幼な過ぎたようである。しかし今になって考えると、「蝉しぐれ」（藤沢周平）の終章で「文四郎さんの御子が私の子で私の子供が文四郎さんの御子であるような道はなかったのでしょうか」とお福さまが言い、助左衛門が「それが出来なかったことを、それがし、生涯の悔いとしております」と答える場面の描写があるが、同じようなことを夢想できる女性がいたなればどうであったかと考えると、過ぎし時間を取り返したい気がしないでもない。

ともあれ遠い日の儚い幻の如きものである。因みに、二十八回生からは素敵な四組のカップルが誕生している。

入学後の生活についてどうかと言うと、まず住居は永国寺町に確保できた。祖父が高知市の助役時代に購入していた家が、幸いにもあの空襲の中で焼け残っていたので、借家人と交渉して母屋七部屋のうち玄関脇の三畳間を返してもらい、そこで生活することにした。

食事は自炊することとし、本山の家族とは別に米穀通帳を作って配給されるもので調理することとしたが、どうしても簡単なものになり勝ちであったので、せめて卵でもと思い日曜市で鶏を買って来て飼ったり、家の前の二坪位の空き地を耕して野菜を育てたりして成るべく単調にならないように工夫した。

思えばこれが学校を終えるまで十年間に及ぶ自炊生活の第一歩であった。

食糧不足を補うため、御機嫌伺いと称して母の姉達の嫁ぎ先である春野や長浜、浦戸の伯母の家々を週末に訪ねることも多かった。行けば不憫がって御馳走してくれた上に、帰りには何がしかの食べ物と小遣いまでもらって大いに助かったものである。長浜・浦戸に行くには電車で桟橋通五丁目まで行き、桟橋から出ていたポンポン蒸気の巡航船で行ったと記憶している。

お世話になった伯母・伯父も、その跡を継いだ従兄・従姉達もとっくに鬼籍に

入って今ではその子達の世代の時代になっている。今度の同窓会への出席は又とない機会なので久しぶりに墓参りをして手を合わせて来ようと考えている。

一人暮らしを始めて困ったことは、入浴と洗濯である。本山では毎日風呂を沸かしていたが、高知の家には風呂桶もなく焚くべき薪もない。止むを得ず銭湯を利用することにしたが、これには色々と問題があった。その一は盗難であり、その二は衛生であり、その三は営業日であった。

当時の世情を反映してか一寸した盗難騒ぎが頻発していた。風呂屋のあちこちに「盗難予防」の紙が貼ってあったが、一向にその効果はなく、まさに文字通りのこと、即ち「盗ハ難シ予防シ」の結果に終わっていた。

また、当時の社会状況から公衆衛生の状況も相当にひどく、風呂に行っては有難くないお土産、ノミ・シラミをもらって来ることもあり、家に帰ってから着ていたものも全て熱湯で消毒する必要があった。

更に燃料の関係で毎日営業している銭湯はなく、曜日を決めて交代で営業していたので昨日は中の筋、今日は帯屋町、明日は中の橋と捜し歩いたことだった。

洗濯には本当に泣かされた。現在と違い電気洗濯機というような文明の利器は

なく、あるのは盥と洗濯板であり洗濯石鹸のようなものもなかったと思う。石鹸の代用は灰汁ではなかったかと思うが、今となっては定かでない。

暖かい気候の時はともかく冬場は大変だったことは鮮明に覚えている。今考えると我ながら良くやったと思う。

日常の生計はどうしていたかと言うと、前記の永国寺町には母屋の他に三軒長屋の貸家があったので、この家賃で生活費と学校の授業料を賄っていた。確か全部で月額百六十円か百八十円位であったかと思うが、幾ら一人暮らしとは言え相当に厳しかったことは間違いない。これが今に続くお金に縁のない貧乏暮らしの始まりである。

以上いろいろと拙いことを思い出すまゝに書き連ねたが、同窓の諸兄姉が入学当時のことを思い起こす縁(よすが)の一端ともなったとすれば幸いである。

いずれにしても、土佐中学に入学し高校卒業までの六年間に亘り、良き師に教を受けるとともに、優れた学友と共に学び得たことが、私の人生の出発点であり最大の財産であったことは疑いのないことである。

社会に出てからは、国土の復興・経済の発展とともに概ね順調な生活を営むことができ、今日在るはまことに有難いことで、往時を憶えば感慨も一入である。

擱筆するにあたり、今まで受けた同窓の諸兄姉の御厚情に改めて感謝するとともに、これからの御健勝と御多幸を心から祈念する次第である。

（平成二十五年七月七日記）